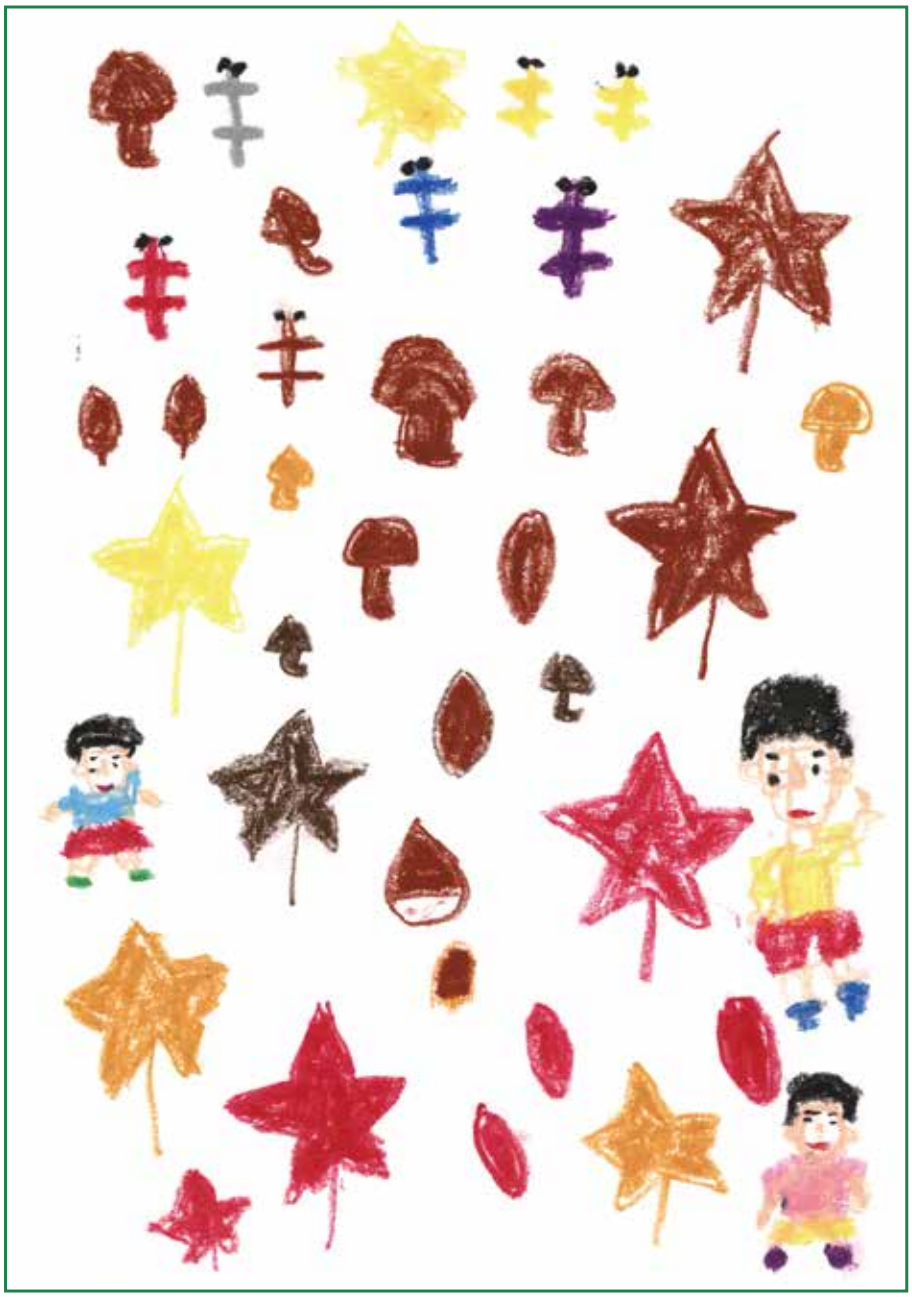
社会福祉法人ゆたか福祉会広報

ゆたか福祉会キャラクター
ゆたかめくんとみらいちゃん

2024
No.501

障害者のゆたかな未来をめざして10



「秋」
ゆたか生活支援事業所
なるお
わかばホーム
中野 稚也さん
※紹介が11ページにあります。

CONTENTS

▶ 私たちの実践 食べたい食事を追い求めて …… P2～3
▶ 暮らしの中に彩りを「南障会」一泊旅行 …… P4～5

2024年10月10日 毎月1回10日発行　一部200円（法人会員・賛助会員は会費の中に購読料を含みます）

発行 / 社会福祉法人ゆたか福祉会　〒457-0852　名古屋市南区泉楽通四丁目５番地３
TEL 052-698-7356　FAX 052-698-7358　https://www.yutakahonbu.com/

愛知県ファミリー・
フレンドリー・マーク

ゆたか福祉会　検索

シリーズ

私たちの実践

食べたい食事を追い求めて❶

「食べることは生きること」「健康寿命のカギは口の健康」といわれるように、食事はただの栄養補給ではなく、「食べたい」「おいしい」と思える心を育み、毎日を楽しく過ごすための心身の健康の土台になります。

ゆたか福祉会には「食と健康推進委員会」があり、栄養士・管理栄養士・調理師が所属して、各事業所の給食を通じた健康づくりについて交流を行っています。連載の最初となる今回は、ゆたか希望の家（以下、希望の家）での実践観について報告します。

はじめに

希望の家の方針には「食べたい食事の追求」という言葉があります。好き嫌いとは別に、病気や障害の重さによって食事形態が制限されている仲間たちが、皆さんの周りにはいないでしょうか？そんな仲間たちに対して「私たちが出来ることはないか」と、仲間たちの反応も含め、食事形態について考えていく必要があると考え、日々の実践に繋げています。

ゼリー食の導入「希望の家のご飯はまずいから、病院に帰りたい」

時は2013年に遡ります。誤嚥性肺炎で入退院を繰り返していたAさん。入院前は刻み食を食べていました。当時の希望の家では、刻み食で誤嚥するならとペースト食へ変更し提供していました。

退院して少し経った頃、「病院に帰りたい」と訴えがあり、Aさんの思いを追及していくと「食事がまずい」「病院のご飯が美味しかった」と話されました。病院に確認すると「ゼリー食」を食べていたとのことで、すぐに「施設でも出来ないか」を探り、ゼリー食調理、提供へとつなげました。

ゼリー食を導入してからは、給食を食べて頂けるようになり、「これ何？」と献立をひとつ一つ職員と楽しみながら食べる姿に変わっていくようになりました。また、ゼリー食へ移行したことで、食事時間の短縮、食事に集中することが出来るようになり、誤嚥性肺炎の発症やムセる事自体も少なくなっていきました。実際、最後に入院をした際に受けた内視鏡検査では「トロミ付極刻み食なら食べられる」という診断でした。Aさんはご自身の思いを明確に表現し、ペースト食の在り方、「ゼリー食を作ろう」とするきっかけをくれました。

当時の希望の家として、ゼリー食は革新的な物であり、現在も咀嚼・嚥下が弱くなっている方々へ提供している食事形態です。

極刻み

ゼリー食

ゼリー食が食事として認識されない「わしの食事どこかね」

2020年、「食べ方が早く、ムセる事もあるから」と刻み食を提供し、亡くなられる直前まで箸をしっかりと使いながら、自分で食べられていたBさん。この方も体調不良で誤嚥性肺炎を起こしましたが、入院が必要となった際「検査終わったら帰ろっか」と、何事もなかったように帰寮する姿がありました。

当時の支援員からすると〝誤嚥性肺炎＝治るまでは入院して絶食〟というのが常識だったので、帰るとなると「栄養は？」「食事は？」と疑問が沢山ありました。しかし当の本人は帰寮後、食事の時間には食堂に来て「わしの食事は？」と食事が出てくるのを待っていました。「誤嚥性肺炎でも食べる気持ちがあるのだ」と訴えているようでした。

炎症反応がある中でのご本人の要求だったため、病院に相談をし「ゼリー的な物なら…」と返答を受けま

した。すぐに厨房と確認を取り用意をしました。しかし、「わしの食事はこれかね？わしの食事は違うよ」とゼリー食を食事と認識されませんでした。「病院の先生と話をしてこうなった」と伝えても、Bさんは静かに「わしの食事は〇〇君が食べている、ああいうのだよ」と、しっかりと刻み食の仲間の食事を指差して明確に伝えてくれました。

「食べられる食事」と「食べたい食事」

日中はなるみ作業所に通い、希望の家を生活の場としていたCさん。定期的な低体温症、それに伴う誤嚥性肺炎を約2年間繰り返していました。初めのうちは一口大の食事を自力で食べていましたが、次第に一口大が刻み食になり、刻み食がゼリー食になり、自力摂取は介助になりました。食事環境も食堂から個室対応になっていき、食事支援も大きく変化していきました。2023年秋頃には、ゼリー食とゼリー粥を提供していました。しかし、2週間近くほとんど食事が摂れず、食べようと口を開けても一口目でムセて「まぁええ」と食事を終了。支援員としては「何か、少しでも」とご本人様が好きそうなものを試した事もありました。しかしCさん自身の嚥下機能が低下しており、主治医からも「摂食は難しい」と判断されました。この時にはすでに「飲み込めず、口から出てきてしまう」「水分が奥に垂れ込んで咳き込む」などの悪循環で、支援員としては八方塞がりな状態でした。

この頃には、ご家族や主治医、施設長との話し合いも何度か持ち、「食事支援は無理しない」「ご家族が提供する食事は見守っていくこと」として発信が出されていました。実際、給食を食べられなくても、面会においでになったご家族が渡す飲み物は自分で持って飲もうとし、飲み込めないけど笑顔でパンを次々と口に入れる姿などを見せてくれていました。

「安全」と「ニーズ」は、どちらかではなくどちらも大事

3事例を挙げましたが、総じて言いたいのは「〝安全〟な食事が全てではない」という事です。それぞれ誤嚥性肺炎発症後の出来事ですが、三種三様で対応は違います。Aさん以降、ペースト食で退院してくる方々へは、ゼリー食の提供を基本としていましたが、昨年度また新たな課題と向き合うことがありました。

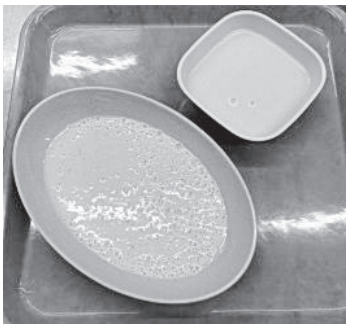
入院時はペースト食、退院後はゼリー食を食べていたDさん。安定して食べられるようになってきた時、ペースト食を提案すると「今が安定しているのになぜ無理をする必要があるのか」「ゼリー食とペースト食では嚥下食のレベルが違うから無理をしない方が良い」と止められたことがありました。また「ゼリー食だから外食が難しい」と伝える事も続き、「寿司食べたい」「メロンソーダ飲みたい」などの要求も徐々に減ってしまいました。

自分たちの仕事の省略が仲間の将来、思いを潰す。〝安全〟なだけの食事では仲間の要求を潰してしまいます。

法人理念でも「いのちとねがい」という言葉があるように、どちらか一つではなく、その人らしく生きるためには両方を守っていく必要があります。「ゆたかな暮らしの実現」をめざすためにも、仲間たちの願いを大切にしながら、職員の連携を大切にした今を、次号で報告していければと思います。

ゆたか希望の家　富永 安理沙

常食



ペースト食（別）

ペースト（全混ぜ）

暮らしの中に彩りを

9/5~6 5年ぶりに南障会一泊研修旅行開催！！

天候にも恵まれた9月初旬、南区障害者関係団体連絡会（南障会）の一泊研修旅行が5年ぶりに開催されました。今回は福井県の「三方五湖レインボーライン山頂公園」と「福井県立恐竜博物館」、宿泊先の石川県山代温泉を巡るコースとなりました。ゆたか福祉会からは南区内のグループホームを中心に、55名もの参加申し込みがあり、総勢75名でのバス旅行となりました。

初日の三方五湖では、ケーブルカーで山頂へ上がり、壮大な景色を眺めながら、ソフトクリームを笑顔一杯で食べる姿がたくさん見られました。また宿泊先では、大きな温泉に豪華な食事を満喫するだけでなく、二次会のカラオケに参加される仲間も多く見られ、他事業所の方々とのちょっとした夜更かしを体験されていました。

２日目の恐竜博物館では、見上げるような恐竜の骨格標本や、それらを包み込むようなドーム型の施設の大きさに驚きながら、記念撮影やお土産選びを楽しむ様子も見られました。

久しぶりの一泊旅行でもあり、引率職員も初めて参加する若い職員が多く、仲間たちに丁寧に向き合う姿に感心しました。「普段関わりが無い方たちとの交流を深め、良い学びの機会にもなったかな」と感じた二日間でした。

トライズ　佐藤 正章（南障会事務局）

◆ゆたか生活支援事業所かさでら

今回は仲間７名、職員３名の総勢10名での参加で、「かさでら」では久々のお泊り旅行でした。何がいるか等、仲間を中心に職員も一緒になって新しい洋服を購入したり、準備から楽しい旅行の始まりでした。

当日はバスに乗り込み、出発！「カラオケしたい方～」のバスガイドさんの声掛けに、一斉に「はーい！」と元気な声が鳴り響きました。これ歌い、あれ歌いの大合戦で、みなさんそれぞれ２曲ずつ歌われ、楽しそうな雰囲気のバス内でした。

食事に観光、温泉ホテルに宴会ありの２日間。仲間の笑顔が数え切れないほど生まれました。温泉ホテルでは、２回お風呂に入ったりと、普段ではなかなか見られない姿がありました。大きいお風呂にワクワクで、旅行後もお風呂の話題は尽きません。お土産もたくさん購入し、土産話を旅行後も楽しまれています。

片桐 由麻

◆ゆたか生活支援事業所あつた

新型コロナが５類となり、約４年ぶりの旅行となりました。「事業所あつた」では、仲間13名、職員５名の参加となりました。２日目の恐竜博物館では、約数百万年にわたる恐竜の歴史に思いをはせながら、有名なティラノサウルスやブラキオサウルスなどの動いている展示・模型の迫力に皆さん、興奮されていました。

２日間、普段とは違う仲間の笑顔が沢山見られ、とても楽しく過ごされていたように感じます。一緒に参加でき「楽しみを共有することが出来て良かった」と思うと同時に「次回の旅行や取り組みも参加したい」と思いました。

向山　涼太

◆ゆたか生活支援事業所なるお

事業所なるおからは３名の参加でした。あさがおホームの的場さんは「肉が好き」と言われていましたが、昼食は甘えび、夕食は蟹に一番に箸が伸びていました。温泉はゆっくり温まるまで入られ、露天風呂や朝風呂もニコニコと満喫。明治ホームから妹さんも参加されており、久々の再会に抱き合っていたのが印象的でした。

第一八光荘の長井さんは観光地や宿情報を事前にスマホで調べてきたとのこと。天空テラスでは撮影スポットで写真を撮ってくれたり、宿では「温泉卵が作れるよ！」と教えてくれたり、旅上手でした。

懐かしい面々とお互いの今を交流できたり、他事業所のなかま・職員に相部屋でお世話になったり、他団体の方にも声をかけて頂けたり…。充実した２日間となりました。藤田 加奈

◆リサイクルみなみ作業所

今回の旅行には作業所からは、なかま３名、ご家族１名、職員１名が参加しました。またグループホームからも５名のなかまが参加し、全体では 10 名の参加者でした。

旅行中は、バス内でのカラオケに夢中になる方、食事を楽しむ方、おみやげ選びに夢中になる方など、思い思いに旅行を楽しんでいる様子がありました。

中でも私が印象に残ったのは、いろいろな場面でなかま同士が久しぶりに再会し、互いの近況を語り合う姿でした。その姿は懐かしさや喜びと言った色々な感情が沸き上がり、普段とは異なる一面も垣間見えました。

私自身も以前勤めていた作業所のなかまの姿を見かけて、当時の話を振り返りながら旧交を温めることができ、こんな旅行の楽しみ方もあるのだと思いました。

前川 一広

◆ゆたか生活支援事業所みなみ　～人気だった「恐竜博物館」～

事業所みなみからは職員３名、仲間６名の計９名で参加しました。恐竜博物館の館内ではエレベーターを降りると、正面に動くティラノサウスがいました。あまりの迫力に立ち止まって見たり、写真を撮っている仲間もいました。バスガイドさんからは「少し怖い」と聞いていましたが、皆さん怖がっている様子はなく楽しく見て回られました。

他にも恐竜のオブジェや化石などが、たくさん展示してありました。大きな恐竜のオブジェはテンションが上がるほど興味を示していました。化石も「どんな化石なのか」興味を持つ仲間が多かったです。お土産コーナーでは、作業所やホーム、家族に買って帰るお土産を何にするか、皆さん真剣に悩んでいました。

最後にソフトクリームをみんなで食べました。外の気温も少し暑かったので、ソフトクリームがさらにおいしく感じました。最後に全員で記念写真を撮り、笑顔いっぱいの素敵な旅行になりました。

小川 健斗

◆地域生活支援拠点事業所まーぶる

「まーぶる」からはなかま３名、職員３名、ご家族３名の計９名が参加しました。出発前から「〇〇食べたい！」「〇〇したい！」との声もあり、旅行を楽しみにされている様子が見られました。旅行中や旅行後も「ご飯が美味しかった！」「恐竜博物館が楽しかった！」などの言葉を聞くことができ、たくさんのなかまの笑顔を見ることができました。それぞれ楽しい思い出ができたのではないかと思います。

入職して５ヶ月、南障会の旅行に初めて参加させていただきました。他事業所のなかまの皆さんと交流ができたことや、ご飯も美味しく、どこの観光地もとても魅力的だったことなど、皆さんと一緒に素敵な思い出を作ることができました。

今回の旅行は貴重な経験になったと共に、２日間があっという間ですごく楽しかったです。また機会があれば参加したいと思いました。

太田　実里

シリーズ いのちを守る

初めての「南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）」発表を受けて

～備えの確認と必要な見直しを～

8月8日夜、気象庁から発表された「南海トラフ地震臨時情報」。ゆたか福祉会ではこれを受け、翌朝、各事業所管理者に

＊通常の業務を継続しつつ、1週間程度は地震の発生を警戒し、地震への備えと「自然災害発生時における総合対策計画」に基づいた対応の再確認を行うこと

＊お盆休暇に入る時期であり、職員の参集基準や連絡体制について留意すること

等の連絡を行いました。ゆたか作業所での対応を紹介します。

繰り返しの訓練と連絡体制の強化を

ゆたか作業所　所長　吉田 博

夕方の送迎支援も終わり「ホッ」と一息ついたところで、日向灘での地震速報を目にしました。最初は遠方の地震なので、「地震があった」という認識でしたが、17時過ぎに「南海トラフ地震臨時情報（調査中）」が発表されことから、緊迫度が増しました。

この情報がどの程度の情報なのかを調べるのに時間を要しましたが、情報自体が緊迫度の増す南海トラフ地震で初めて発表されたこともあり、18時過ぎに全職員へ注意を促すメールを送りました。

その後、19時15分過ぎに「巨大地震注意」が発表されたので、「臨時情報（巨大地震注意）が発表された」こと、「参集や避難等特別の動きはないが、地震の備えをするように」というメールを今度は職員だけでなく、仲間や家族全員にも一斉メールし、注意の呼びかけを行いました。

災害時にＳＭＳによる緊急メールが速やかに送信され、相手側がきちんと見ることができるのか等、不安もあります。防災訓練同様に繰り返し訓練を行い、災害伝言ダイヤルの習熟等を呼びかけ、連絡を取り合っていく環境や構えをつくっていくことが大切だと思いました。

8月13日

「大規模地震が起きた時、どうする？」学習会開催

地域支援事業本部長　熊谷 由美子

「南海トラフ地震臨時情報」が発表された5日後、「地域支援事業本部」全体職員会議で、学習会が行われました。テーマは「大規模地震時に想定される名古屋南部地域の被害と、いざという時の心づもりと事前の準備」。約４０名の職員が参加しました。

当日は「災害時事業継続計画（ＢＣＰ）」について、2事業所から報告後、学習会と同テーマで、名古屋大学減災センター特任助教授の千葉啓広先生より、45分程お話いただきました。

その後グループに分かれ、「一人夜勤の時、大規模地震が起きたらどうする？心配なことや不安なことは？」について討議しました。「職員室が大変なことになって、仲間のところまでたどり着けるのだろうか？」「どこに避難していいか、わからない」など不安が出されました。

今回の学習会を契機に各事業所の職員の中で、「いざという時どうするのか」についてよく話し会い、できる準備を急いで進めていく必要があることの確認ができました。

平和への願い

神田先生から、「働きたい」という思いを持つアフガニスタン出身のファルザドさんを紹介されたのは、2022 年も終わろうとする頃でした。最初の「出会い」から 1 か月後、ファルザドさんの姿はゆたか作業所のデイ現場にありました。それから約 1 年半働いて頂き今年の 5 月に、急遽、次の安住先が見つかり、慌ただしく日本を離れられました。

このことを広報誌 8 月号で紹介したところ、神田先生が翻訳してファルザドさんに届けられ、そして直ぐに、ご本人から返信がありました。「素敵なメッセージ」と先生からお伝え頂いた内容を、皆さんにもご紹介します。

ファルザドさんからのメッセージ

Dear Sumire san. Thank you very much for sharing the magazine with an article about me. I have had part of me left in there in Japan. My coworkers and supervisor were very friendly and supportive. The special need friends were very innocent and friendly. It seems they have had very simple life however who knows what have been their dreams and perceptions of the outer world. I am happy having those memories as an integral part of my life. I am pleased they still remember me. I am thankful of the Yutaka esteemed leadership for their invaluable support when I most needed. I am also very grateful of your kind support which enabled me overcome the difficulties and manage my life during my stay in Japan. Thank you very much.

神田すみれ先生の紹介

（略歴）米国公立高校卒業後、オーストリアへの半年間の留学を経て米国州立大学を卒業。台湾にて日本語教師として勤務後帰国、名古屋大学国際開発研究科博士前期課程修了、同研究科特任助教を経て、愛知労働局にて外国人雇用管理アドバイザーを務めるなど、行政機関で相談員、通訳者として多文化共生・外国人支援活動に携わる。あいち多文化共生推進会議委員。犬山市多文化共生推進会議委員。

＜神田先生（和訳）＞

すみれさんへ。雑誌に私のことを紹介してくださってありがとうございます。私の一部を日本に残してきてしまったような気持ちです。ゆたかで一緒に働かせてくださった同僚たちや上司は、とても親切で、私のことを応援してくださいました。

特別な支援を必要とする友人たちは、とても無邪気で、そして優しくしてくれました。彼らはとてもシンプルな生活を送っていたように見えますが、彼らの夢や外の世界に対する認識が、実際にはどのようなものか、知る由もありません。

私は、彼らとの思い出が、私の人生の大切な一部であることをうれしく思います。そして、彼らがまだ私のことを覚えていてくれることが、とても嬉しいです。ゆたかの尊敬する指導者の方々には、私が支援を最も必要としていたときに、かけがえのないサポートをしていただき、心から感謝しています。また、私が、日本での生活の中で困難を乗り越え、なんとか自分たちの生活を維持することができたのは、皆さんの親切なサポートのおかげです。本当にありがとうございました。

2024年度

ゆたか福祉会 保護者連合会 研修会 開催！

保護者連合会担当　萩原　千秋

9月10日(火)10時から15時まで、名古屋国際会議場で研修会を行いました。当日は、33名の家族と職員33名が参加。テーマは「親・家族の願いを第7期総合計画へ～私たちの今（心配事・困っていること等）と、今後への要望・期待」。4本の職員報告と、ふれあい共同作業所保護者会会長の矢満田佳代さんからの報告、午後は分散会を行いました。

職員の一人目は、なるみ作業所の安藤玲偉さん。経験を積む中で世界が広がった喜びと「本当の意味で”なかま“になりたい」と報告しました。二人目は、ゆたか生活支援事業所みなみの小林みのりさん。「コロナ禍で何もできない事がもどかしく、申し訳なく、ホームの生活では仲間一人ひとりの思いを聞き大切にしたい」と話されました。

三人目は同じく生活支援事業所なかがわで働く片岡由加梨さん。「ホッとする日常を作っていきたい」「グループホームは自分の部屋を持てる、自分の好きに過ごせる場所」「ぜひ家族の方に知ってほしい」と報告しました。四人目はゆたか作業所に配属された理学療法士の今村修さん。リハビリ業務（個別リハ・集団体操や環境整備等）について、丁寧に紹介されました。

片岡さん

矢満田さんは、息子さんの生い立ちと作業所づくり、ゆたか福祉会との出会い。息子さんは念願のグループホームに入り6年目。「ゆたかはこのままずっとやってほしい」と結ばれました。

午後は10グループに分かれて、午前の感想と法人への要望を交流しました。「リハビリをどんどんやってほしい」「重度の障害があっても入れるホームを作ってほしい」「新事業を作るときは親の意見を聞いてほしい」「いつまでホームにいれるのか心配」「職員にやめないでほしい」「家族会の存続、世代交代、どうするか」等々、どのグループも話が盛り上がりました。

事業所を越えて家族が話す場。それを聞く家族と職員。貴重な時間でした。

保護者の感想

ワークセンターフレンズ星崎　金田　珠栄

1日の研修会を通して、1番印象に残ったことは、今までの分散会とは違い、各グループに親が小人数で分かれていたことです。一人一人の発言の機会が格段に上がり、個人的な意見や今の悩みを職員の方に直接話せた事です。

また、職員や事業所、法人への要望としては、なかまの安心・安全の為に、是非とも送迎サービスの実施を真剣に考えていただきたいです。送迎を頼むと、親の怠慢と思われる職員の方が少なからずいると聞いています。怠慢であろうと、事情があろうと、送迎は必要と感じます。

宜しくお願いいたします。

職員の感想

つゆはし作業所　加藤　沙彩

保護者連合会研修会という名の通り、お忙しい中でも多くの保護者の方々、さまざまな事業所の職員さんが集まっていて驚きました。

作業所の家族会とはまた違った形での、ご家族の方とお話をする機会でした。直接ご家族の方と対面してお話をする機会は少ないので、緊張もしましたが、明るい雰囲気で話し合える空間はとても大切なものだと思いました。

入職して5ヶ月目ですが、なかまにもご家族にも寄り添った支援ができるよう精進していきたいです。

「認知症になっても安心して地域で暮らせるために」

生活サポートセンター名倉　篠原 和子

2024年6月から認知症カフェ「オレンジカフェなぐら」を生活サポートセンター名倉が中心となり、設楽福祉村の3つの事業所が協力して開催しています。ゆたか福祉会の理念である「誰もが安心して暮らせる地域をつくるため、たくさんの〝つながり〟を築き拡げていきます」を実現するため、設楽福祉村の地域づくりとして取り組んでいます。

2030年には、523万人が認知症になると試算されており、既に私たちは「認知症がごく当たり前の社会」「認知症とともに歩む時代」に生きていると言えます。オレンジカフェなぐらでは、認知症地域支援推進員の協力で、毎回ミニ講和や思い出ばなしのテーマを決めて、年6回の開催を予定しています。

思い出を話す事（回想）は、昔を思い出すことで、普段は眠っている記憶が脳から引き出され脳の活性化につながると考えられています。

6月は「田植え」、7月は「お盆」をテーマに、参加者が3つのテーブルに分かれて写真をみながら過去を振り返りました。7月は参加者自身がお盆に飾るキュウリやナスで精霊馬を作り、懐かしい話や思い出を語り合う機会となりました。柏餅を美味しそうに食べる参加者の満足そうな姿や、「参加する前は少し不安だったが、参加してよかった。次も楽しみ」という声なども見聞きしました。

オレンジカフェなぐらは、誰もがおしゃべりや学び、共に過ごす時間を楽しみ、「自分らしく安心して過ごせる場所」として、「認知症になっても大丈夫」と言い合える地域づくりをめざして今後も取り組んでいきます。

8.7 今回で2回目の「2024年度日中事業所合同職員研修」開催

ゆたか福祉会では、今年度から新たに「通所部門所長会議」が2ヶ月に1度、開催されるようになりました。法人内では11か所の日中事業所があります。今回は「通所部門所長会議」の主催で、午前中は事業所単位での研修を行い、午後はZoomによる全体研修を行い、すべての事業所から105名の参加がありました。

研修のねらいは、コロナ禍以降、事業所間での連携が希薄になっており、就労支援や障害の重い仲間たちに対しての支援や実践を共有し、新たな実践の気づきを創る研修として位置付けての開催です。

研修は大きく3つに分けての内容でした。

一つは「障害の重い仲間たちに対しての表現活動、創作活動の幅をどう拡げていくか」をテーマに、吉田マリモさんに講演をいただきました。吉田さんは京都在住のデザイナーで、いろいろな事業所との取り組みを拡げている方です。

二つ目は、「強度行動障害の仲間に対しての実践発表」を、「あかつき共同作業所」と「みらいろ」から行いました。また「理学療法士による機能訓練の取り組み」を「ゆたか作業所」から行いました。

最後に「トライズ」「つゆはし作業所」から、5S活動の取り組みや就労支援をテーマにした報告を行いました。吉田マリモさんの話を含め、5つの事業所からの実践報告を通して、新たな発見や気づきを生かしていきたいとの思いがあります。また障害が多様化し、高齢化も進んでいるだけに、それぞれの事業所での強みを打ち出した実践を進めていく大切さが確認されました。

ゆたか作業所 吉田 博

きょうされん荒彫塾 研修報告

「ゆたかのワクワクリーダーへ」

荒彫塾とは次世代を担う職員を育成する狙いで「人権感覚を磨き、行動する力を蓄えよう。～自分の実践をふりかえりながら～」をテーマに２０２２年から2年間の学びを経て、今年5月29日きょうされん全国総会にて修了することが出来ました。

受講するにあたり、皆様の大切な”お金と時間“を費やしていただいたこと、そして多くの皆さんに支えていただいたことに厚くお礼申し上げます。

受講したこの時間は控えめに言って最高の時間でした。1年目はオンライン開催のため、全員が集ったのは2年目のみになりました。

しかしその分、濃厚な時間となり、広島県大久野島では戦時中に使用禁止の毒ガス製造工場として地図からも消された事実。教科書には載せることのない、学べなかった事実を知ることが出来ました。

この使用禁止の毒ガスは欧米諸国からの報復を恐れ、アジア諸国のみに使った事実を聞いたときは、衝撃をうけました。

日本は唯一の被爆国で、戦争の悲惨さを伝えることは大切です。一方で「禁止された毒ガスを使っていた」という事実を受け止める必要があると思います。

今年3月から、きょうされん教育研修委員会の委員として、全国大会分科会やその他の研修を担当することになり、受講側ではなく運営側として携わっています。

「研修は楽しく学ぶ」そのような場づくりを目指して、これからもたくさんの”ワクワク“を創っていきたいと思います。

つゆはし作業所　石田 和久

全国社会就労センター協議会

リーダー養成ゼミナールに参加して

「繋がることが自分の財産に」

今年度、機会を頂きＳＥＬＰ（全国社会就労センター協議会）の第28期（令和6年度）リーダー養成ゼミナールに参加しています。1600字のレポートと自事業所に関するフェイスシート、修了レポートのサマリーなど事前提出課題に取り組み、前期面接授業が8月21日～23日、全国社会福祉協議会にて行われました。

全国からは計16名の参加者が集まり、3日間にわたって授業とゼミナールが行われました。就労支援やチームマネジメントの基礎を学び、参加者同士の交流も早速、深まりました。

これから自事業所の事業振興について8000字のレポート作成と、オンライン及び面接授業の約半年にわたった取り組みと関わりが続きます。

日常業務と並行しての学習は、負担も決して小さくはありませんが、ここで繋がることができた関係は、これからも自分の財産にできる可能性があると感じています。

なるみ作業所　須澤　守

一般寄附（8月）

順不同 敬称略

株式会社大谷商会

賛助会員新規加入者更新者ご芳名一覧

（8月1日～9月20日 手続き分）

順不同 敬称略

鈴木 智
千葉 恵子
脇田 武子
脇田 厚子
村田 昌史
中山葉子美
ナグラサービス株式会社

日誌 8月

2日(金)	共同墓地「盆供養祭」・管理委員会
7日(水)	ゆたか相談支援事業所 あおなみ実地指導
8日(木)	デイなぐら・居宅実地指導
12日(月)	事業運営推進会議
19日(月)	トータル人事システム検討委員会
20日(火)	広報・ホームページ編集委員会
21日(水)	所長会議 / 相談支援事業所ゆたか通勤寮実地指導
23日(金)	基礎研修
26日(月)	新所長研修 / 研修部会議
27日(火)	職員ハンドブック改訂委員会
28日(水)	SDGs委員会
31日(土)	理事会

表紙の作者紹介

「秋」

ゆたか生活支援事業所なるおわかばホーム
中野 稚也さん

この絵は昨年、秋を迎える前にイメージして描いた絵です。クレヨンを使って画用紙に、もみじやとんぼ、栗、きのこ、ドングリなどを描かれました。描いた後、部屋に貼っていたものですが、職員に後押しされたこともあり、今回応募をしました。

何度か表紙を飾らせていただいたこともあり、本人も当選するとは思っていなかったようで、職員から当選を聞いた際にはとても驚かれていました。

これまでに書かれた作品も大事に保管されていますし、当選された作品は、写真立てに入って返ってきますので、飾ったりしています。

「これからも絵を描くことは続けたい」と話されていた中野さんです。

広報・501号

2024年10月号(2024年10月10日発行)
定価1部200円
法人協力会員・賛助会員は会費の中に購読料を含みます

発行・編集 ／ 社会福祉法人ゆたか福祉会
印　　刷 ／ 株式会社東海共同印刷

法人協力会費・賛助会費・寄附金など福祉会への申し込み、ご送金は

法人協力会費 ＝ 年間 1口 6,000円、
賛助会員（個人 1口 3,000円、企業団体等 1口 5,000円）

●銀行口座　名義はいずれも社会福祉法人ゆたか福祉会

・三菱UFJ銀行　柴田支店　普通預金 291-884
・中京銀行　鳴海中央支店　普通預金 150-425

●郵便振替口座　00820-8-54026 社会福祉法人ゆたか福祉会

ゆたか福祉会広報 No.501＊2024年10月10日

仲間

ホームへ引っ越しをして ～新しい暮らしをのびやかに～

ゆたか生活支援事業所尾張 ケアホームあかつき

平野 隆之さん

隆之さんは現在43歳。15歳で入所した小規模作業所を19歳で退所し、2001年より「あかつき共同作業所」へ通所されました。パンやクッキーづくりの現場で仕事をしていましたが、体調などを理由に通所が少なくなり、2004年に生活環境が落ち着いている第2ゆたか希望の家へ異動され、約20年を過ごされました。

そして、年を重ねたご家族の「近くで過ごして欲しい」という思いや、隆之さんにもグループホームでの暮らしが視野に入るようになり、「いろいろな社会経験を広げて欲しい」という思いから、2022年に事業所尾張のホームで体験利用がスタートしました。そして翌年4月から「ケアホームあかつき」での生活に移りました。

ご本人の「強み」は、〝こだわり〟の強さがありながらも、一方で柔軟さも合わせ持っていることです。洗濯物干しや食器洗いも、職員の声かけや毎日の繰り返しを経て、自分で「こうしよう！」「こうした方がよいかな」と行動することもあります。

職員が対応で気をつけているのは、音に敏感なことです。職員の他の仲間への声かけや、本人の意図しない音に対して、ときおり不安になることが見られます。そんな時は、自分に「大丈夫」と言いきかせ、気持ちを抑えようとされています。

これからも生活での見通しづくりについて、寄り添った支援を進めていこうと考えています。

西沢 淳

できる事は自分で

職員

向上心を持って仕事をする

ゆたか作業所 **白井 結菜**

私は、以前働いていた特別養護老人ホームが、撤退してしまうことになりました。これを機にこれまでの経験を活かし、更に自分が成長でき、活躍できる場はないかと探していたところ、ゆたか福祉会に出会いました。

ゆたか福祉会の「職場体験実習」では、自分の経験したことのない、なかまの支援や献立作成やクックチル調理など、スキルアップできる仕事を沢山学ぶことができました。「自分が成長できる場」と感じ、ゆたか福祉会の一員として働きたいと思いました。

現在は、ゆたか作業所の「きっちんYUTAKA」で調理業務、実務業務、なかまの支援を主に行っています。9月からは、献立作成、献立表作り、作業工程表、盛り付け指示書の作成、食材の発注など、新しい業務もたくさん始まりました。

献立作成は難しいですが、食べていただく皆さんに満足して喜んでいただけるように、季節の食材を取り入れたり、彩りを思い浮かべながらメニューを考えることを頑張っています。

また、なかまの支援では、1人1人のなかまの特徴をしっかりと理解し、それぞれに合った仕事の仕方や伝え方を探していく必要があります。まずは「みんながどのような仕事をしているのか」「どういったことが得意なのか、苦手なのか」をしっかりと見て、1人ずつとコミュニケーションを取り、理解していくことが大事だと感じました。

なかまがやりがいを持って仕事ができるような環境づくりと、給食を食べていただく皆さんが楽しみに思っていただけるような献立作成をこれからも頑張っていきます。

なかまと一緒に調理